春日高等学校　遠藤　日向子

今年初めて行われた十八歳での参議院選挙に私は参加した。実際、政治について無関心で無知なため興味も無く行く予定も全く無かったが、友達に誘われたという理由で私は初めて政治に参加した。

世界史を学ぶ中で、世界各地の国は、成立し、争いが起き、戦って滅ぼされ、そしてまた新たに国が誕生することが分かる。そしてその争いはしばしば政権についての闘争があることが分かる。このような歴史をふまえて私は三つのことを考えた。

まず一つ目に、今こうして男女の差別や人種差別によって参政権が左右されない平等な選挙が行われていることは、古く昔から世界各地で、あらゆる人達の、様々な身分による闘いや争いが行われた過去があるからこそ成り立っている当たり前の権利ではないということだ。

そして二つ目に、国民に対する権利が保障され、平等に参政権を獲得できているために過去行われてきたような壮絶な反乱が起きていないということだ。それどころか、選挙権の放棄による問題が深刻化しているという現在の状況を私たちは改め直すべきである。

最後に三つ目は、過去と比べて現在、私たちの政治に関する関心や意欲が低下しているということだ。そして、政治への無関心が政治に関する無知を生み、選挙権の放棄につながるのだと思う。まず政治について知っていくことから始めなければならない。

今回、十八歳での選挙権が認められたことにより私は初めて参政権を行使した。これは自分の政治に対する意識や知識の低さを実感すると共に、自分の一票が政治を動かす、自分も参政権を持つ国民の一人だという責任の重大さを認識させられた。この新たな権利の判定をきっかけに、私はもっと政治について学ぶ必要があると思う。そして、今あるこの当たり前の権利、私たちが自らの手で政治を変えていくことができる権利を持てる幸せを感じ、これからの社会を担っていく世代の一員として過ごしていきたい。